

H29. 9. 5

長尾和宏 (ながお・かずひろ) 東京医大卒業後、大阪大第二内科入局。平成7年、尼崎市で「長尾クリニック」を開業。外来診療から在宅医療まで「人を診る、総合診療を目指す。医学博士。近著「病気の9割は歩くだけで治る!」「薬のやめどき」「痛くない死に方」はいずれもベストセラー。関西国際大学客員教授。59歳。



# Dr. 和の町医者日記



## 膵臓シリーズ⑤

超音波内視鏡検査 (EUS) 先端に超音波装置が付いた内視鏡を使い、胃や十二指腸の中から膵臓に超音波をあてて行う検査。通常の検査に用いられる内視鏡よりも太く、検査時間も長くなるが、体の表面から超音波をあてる腹部超音波検査と違って脂肪や骨、胃腸内の空気に妨げられず、鮮明な画像を得ることができる。

消化器を専門として30年余。自分がどれだけの膵臓がんの患者さんを診てきたのか、頭の中で振り返ってみました。旅立たれた患者さんや、知人の顔ばかり何十人も浮かんできます。しかし「私自身が発見して完治せしめた」と言える患者さんの顔は、恥ずかしながら3人しか浮かびません。医師として情けないことです。今回は、膵臓がんの早期発見についてもう少し考えてみます。

前々回に書いたように、膵臓がんの5年生存率はわずか7・7%です。命を救うためには、がんが2センチ以下で、リンパ節転移がない段階で発見しなければなりません。私は日々の診療の際、75歳以下の人は「この人は膵臓がん、大丈夫かなあ」という目で見ています。しかし、やみくもに見るのではなく、膵臓がんの危険因子にどれだけ該当しているかを数えます。特に、糖尿病▽過度の飲酒▽喫煙▽慢性膵炎▽家族歴の5点に注目して、いくつかな当てはまる人には年に1回は腹部超音波 (エコー) 検査を受けるよう勧め

### 膵臓がんの早期発見

## かかりつけ医と専門病院の連携

めています。その結果、膵管の拡張や膵嚢胞の多発が認められる人には、超音波内視鏡検査ができる施設に紹介するかどうかを相談します。膵臓がんの早期発見には超音波内視鏡が有用だからです。しかし、こうした試みは一医療機関だけではなく、町ぐるみで行わないと、難治性膵臓がんの克服は困難です。

実は、町ぐるみの取り組みで膵臓がんの早期発見に成果を上げている自治体があります。広島県尾道市では平成19年から開業医と専門病院が密接に連携することで、膵臓がんの治療成績が向上しています。市内の開業医が問診と腹部エコーを行い、拾い上げた患者さんを市内の専門病院に紹介する。そこで超音波内視鏡を使った精密検査を行います。こうした取り組みを8年以上続けることで、尾道市における5年生存率は国

の平均の3倍近くに向上しました。膵臓がんの進行度には、がんが膵管内にとどまるステージ0がありま

るならば、腹部にもあててほしいなあ、とずっと思っています。肥満の人を診たとき、心筋梗塞や脳梗塞も心配ですが、膵臓がんも気になります。血液検査により膵臓がんを早期発見する試みも始まっています。国立がんセンターなどは、血液中の「アポリポrotein A2アイソフォーム」というタンパク質が膵臓がんでは低下することに着目。今年7月から鹿児島県内の50歳以上の人を対象にした地域健康診断で、このタンパク質が低下していた人には精密検査を行う大規模な臨床研究を行っています。また、細胞が血液中に分泌する微小物質「マイクロRNA」を分析することで、1滴の血液から膵臓がんを含む13種類のがんの有無を診断できる検査法の臨床研究も始まりました。

尾道プロジェクトや、「CA19-9」など既存の腫瘍マーカーとこうした新しいマーカーの組み合わせによる早期発見の試みに期待しています。